

論文審査の結果の要旨

氏名：高 橋 昂 輝

博士の専攻分野の名称：博士（理学）

論文題名：トロントにおけるポルトガル系コミュニティと都市空間の変容

審査委員：（主査） 教授 矢ヶ崎 典 隆

（副査） 教授 高 阪 宏 行 東京学芸大学教授 加賀美 雅 弘

北アメリカの大都市を理解するためには、移民の流入によって形成された多民族性、ホスト社会と移民社会の動態的關係、時代性を反映した都市の空間構造の変化に着目することが必要となる。地理学は、都市の空間的な特性をフィールドワークに基づいて明らかにしてきた。本論文は、北アメリカの諸都市のなかで民族的にもっとも多様なトロントを対象として、ポルトガル系の移民エスニック集団と都市空間の特性及び変容に着目することにより、都市内部の動態を詳細に検討した研究である。

第 I 章では、本研究の背景と目的を位置付けるために、既往研究をレビューする。具体的には、北アメリカの都市におけるエスニック空間の形成、移民街の変容プロセス、移民街におけるジェントリフィケーションと社会的混合、業務改善自治地区（Business Improvement Area, BIA）と移民街の観光地化、BIA 制度下における都市空間のガヴァナンス、という 5 項目について、既往研究の成果と課題が指摘された。そうした認識を踏まえて、本論文の第 II 章から第 VI 章が展開される。

第 II 章では、トロントにおける多民族化の進行とポルトガル系コミュニティの概要が説明される。多民族国家としてのカナダの形成について、移民法の変遷と移民の流入プロセス、および移民送出国との関連から論じられる。もともとイギリス系とフランス系、およびその他の北西ヨーロッパ系を中心とした複数の集団が存在した。第二次世界大戦後、移民政策がしだいに緩和され、1960 年代には人種に基づく差別が撤廃され、1970 年代に入ると二言語多文化主義が採択された。こうした社会の変化を反映して多民族化が進行した。トロントは、モンリオールに代わって経済の中心となり、多くの移民を引き付けるとともに、最大の人口をもつ都市に成長した。1960 年代から 1970 年代の変化の時代にポルトガル系移民が流入し、都心に近接したリトルポルトガルはポルトガル系の居住、ビジネス、社会組織の集積地となった。同時に、都心部ではジェントリフィケーションが始まり、衰退した都心部で社会経済階層の上昇が進行した。リトルポルトガルでも、1990 年代に入るとジェントリフィケーションによる変化が始まり、ポルトガル系住民とホスト社会住民の混住化が進行している。以上のように、本章では、トロントとポルトガル系コミュニティに関する動向が、全世界（グローバル）、国家（ナショナル）、都市（ローカル）など、多様なスケールで説明された。

第 III 章は、移民街としてのリトルポルトガルの発展段階について、イタリア系の移民街リトルイタリーとの比較をまじえて考察が行われた。ポルトガル系移民の増加に伴って、1960 年代からリトルポルトガルが形成され、移民が居住するとともに、エスニックビジネスと社会組織の集積が進んだ。こうして形成されたエスニック景観の特徴は土地利用調査により明らかにされた。リトルイタリーでは 1920 年代からイタリア系のエスニックタウンが形成されたが、1980 年代までにはこのエスニックタウンから郊外への拡散が進行した。イタリア系とポルトガル系を比較すると、移住の時期の相違が移民街の特徴を規定することが明らかになった。リトルポルトガルでは、ポルトガル系の事業所と居住者が存続するが、それらは減少傾向にあることも明らかになった。本章の考察によって、エスニックタウンの発展段階におけるリトルポルトガルの位置づけが明確になった。

第 IV 章では、ポルトガル系コミュニティにおける空間構造の変容について分析がなされた。着目したのは、ポルトガル系住民の居住地、エスニックビジネス、同郷組織などの社会組織というエスニック機能である。聞き取り調査、シティディレクトリーなどを用いた土地利用の復元、同郷組織における参与観察、事業者への質問票調査が実施された。1980 年頃までは、居住、ビジネス、社会組織という機能はいずれもリトルポルトガルに存在した。しかし、1980 年代から、リトルポルトガルから、北部の移民回廊地域や西部郊外のミシサーガ市へ転出するポルトガル系住民が増加した。1990 年代

中頃以降は、5つの同郷組織の詳細な検討から明らかになるように、社会組織が北部の移民回廊地域に移動した。2000年代以降は、リトルポルトガルではエスニックビジネスが減少した。リトルポルトガルの機能は低下しつつあるが、広域化したポルトガル系コミュニティにおいて、リトルポルトガルがエスニック機能を依然として維持する状況、また、ポルトガル系住民が3つの空間を目的に応じて活用しながら、ポルトガル系コミュニティが維持されていることが明らかになった。

第V章は、BIAによる移民街のガバナンスとブランディングをテーマとする。1970年にトロントで始められた近隣地区を単位としたBIAと、BIA制度を利用した地域ブランディングの動向について検討がなされ、移民街の自治と運営においてBIAが果たす役割が考察された。BIAと呼ばれる都市内の地区は、BIA役員会が中心となって土地所有者と地元の経営者が自治を行う地域単位である。課税により確保された財源を基盤として、その地区の経済の活性化を推進する。このしくみはトロントで誕生し、カナダの他都市へ、また、アメリカ合衆国の都市へと拡散した。そのため、北アメリカの都市内部の動向を検討するためには重要な組織である。トロントの移民街のなかには、エスニック集団の名称を持つBIAが複数存在する。多文化主義政策を反映して、エスニック資源を商品化する動きが活発化している。地域資源を活用したまちづくりによって、都市の商業地区に多様な個性と活力がもたらされる。ただ、こうした自治が、様々な属性の住民が混住化する地域において、住民の意思をどの程度反映しているのかについて議論の余地があることも、本章では指摘された。

第VI章は、前章の考察を踏まえて、リトルポルトガルにおける事業所経営者の社会関係と近隣政治について分析する。リトルポルトガルでは、近年、ジェントリフィケーションが進行し、非ポルトガル系ビジネスが増加している。リトルポルトガルBIAにおいて、ポルトガル系経営者が減少し、ビジネスを目的として流入した非ポルトガル系の新しい経営者（ジェントリファイアー）が増加している。2つの集団の関係を分析するために、人間の社会関係を可視化するソシオグラムと呼ばれる図示法が用いられた。2つの集団は、リトルポルトガルBIAという空間を共有するものの、社会的には分断化されていることが明らかになった。ポルトガル系の経営者と非ポルトガル系の経営者はほぼ同数存在するが、BIAの運営の主導権は、ポルトガル系から非ポルトガル系に移行した。そうした動向は、ストリートフェスティバルの運営からも読み取ることができる。ソシオグラムを用いて都市内部をミクロスケールで検討した研究成果は極めて重要な貢献であり、ジェントリフィケーション研究に新たな視点を導入したものとして大いに評価される。

以上の研究成果は、第VII章に結論としてまとめられている。北アメリカでは、1960年代までの白人中心の社会から、1970年代以降は多民族多文化を尊重する社会への転換が進んだ。こうした背景のもとで、ホスト社会の住民は都心へ回帰する傾向を強め、都心部では多様な集団の混住化が進んでいる。トロントのポルトガル系コミュニティを対象とした本研究は、北アメリカの都市を研究するための1つの方法を提示する。北アメリカの都市は、本研究で注目した、移民法の改正、ジェントリフィケーションの発生、BIAによる近隣単位での自治の導入などを共通して経験してきた。トロントの事例を他都市と比較することにより、現代の北アメリカの都市を読み解くことができる。

本論文の独創的な点は、多民族多文化の存在に寛容になったホスト社会の転換を踏まえて、その変革期にトロントに移住したポルトガル系移民とその移民社会に着目し、リトルポルトガルというエスニックタウンの変化を詳細に論じたことである。さらに、ジェントリフィケーションという都心部への回帰現象と社会経済的な上昇という地域変化の枠組みにおいて、ポルトガル系から非ポルトガル系へと近隣政治の主導権が移行する過程と地域社会の分断化を、ソシオグラムという新しい手法によって描きだしたことである。地理学の視点と方法により都市空間の変容を明らかにした本論文の考察の枠組みは、北アメリカの他の都市を考察するためにも有効である。

このことは、本論文の提出者が自立して研究活動を行い、又はその他の高度な専門的業務に従事するに必要な能力及びその基礎となる豊かな学識を有していることを示すものである。

よって本論文は、博士（理学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以上

平成29年2月16日